

序章

**希望の革命**



## パラダイムシフト

科学技術の知は地球環境と人類に大きな影響を与えています。地球環境への影響は工業化以来の現代文明の進展が影響しています。そして人類への影響は、人口爆発と、その反面でおきている少子化と長寿命化、その少子化と長寿命化がもたらす人口ピラミッドが逆転する人口転換に表れています。

この本では、そのうち人口転換を主な論点に取り上げます。そして、現代人類のパラダイムを述べるために無視できない地球環境については、これまでの取り組みを紹介します。幸い地球環境の問題に関しては、ゴア元米副大統領らのノーベル平和賞受賞があり、人々の注意を引いています。京都議定書なども忘れることは出来ません。パラダイムシフトが必要である理由の一つになっています。

パラダイム・パラダイムシフトという言葉は聴きなれません。パラダイムは十年位前に流行った言葉で、新聞の書評でも取り上げられました。

人口転換からの社会保障負担の問題や多額な国の借金から社会の持続可能性が問われています。この事を「AGING CRISES」として受け止め、その解決に努力してきました。

私はライフワークの集大成として本を出版するときには、「パラダイムシフト」を題に是非

取り入れようと考えるようになりました。

私の学会発表の題に「リハビリテーション医学の天動説と地動説」と「他動運動によらないリハビリテーション管理方法の米国特許について」があります。そして「AGING CRISES」を克服するために、これまで長い間、団塊世代にこれからの暮らしの中で保つ心の有り様を共に考えてもらいたいとして、「団塊世代に問う」と題した学会活動を続けてきました。

「団塊世代に問う」の表現や、その基礎になる事実を表す「リハビリテーション医学の天動説と地動説」を列記する以上に本の内容を表していて、最適であると考えたのです。

## リハ医学の改革が必要

長い研究の成果で、「現在行われているリハビリテーション（リハ）医学が間違いであり、再構築されなければならない」と訴える医師や専門家が増えてきました。

「長寿を得た日本国民や人類に、リハ医学革新の可能性と、リハ医学革新が社会にもたらす結果を知ってもらいたい。そして、リハ医学革新を実現し、生き方や考え方を変えてもらいたい。」私が志してきた事です。

パラダイムは、インターネット上の三省堂辞書で、「ある時代や分野において支配的規範と

なる物の見方や捉え方」と説明されています。そして、パラダイムシフトを、「天動説と地動説」を引用して説明しています。その時代や分野において「支配的規範となる物の見方や捉え方について、時代の変遷につれて革命的・非連続的な変化を起こす事があり、天動説から地動説への変化などのように革命的かつ非連続的に変化する場合」としています。

この本で問うているパラダイムシフトの対象は次の事柄です。

第一に「障害を受容する（治せない）リハ医学」です。

第二に「治らないのだから障害を得たら介護を受ければよい」という考え方のことです。そして第三にそこから生まれてくる「依存する」考え方です。

「お上（官僚や政治家）に任せておけば良い」、「皆で渡れば怖くない」とする考え方に繋がっています。

江戸時代を開いた徳川家康は、「民はよらしむべし、知らしむべからず」を治世の要諦としました。情報を伝えることから始まっている年金騒動を振り返れば、現在まで続いているように思えます。長い間、日本人は、官への依存を美德として、正しく情報を得て自ら判断し行動することはありませんでした。個の確立と自立は望まれなかったのです。

リハ医学の革新により、

「自分の一生の内、死ぬまでの十年間近くを、介護を得て生きるのではなく、自分で頑張っ

て人間の尊厳を守りながら生き抜ける、生き抜く。」を実現できるのです。

私は読者に、リハ医学を革新する事により、高齢になって障害を得ても、自立生活が出来る事を知ってもらいたいです。

また、「自立生活が出来る事は、介護を受ける事が普通のことではなくなり、自立生活を求められる。」と知ってもらいたいです。

### 政治家は役に立てない

政治家は、年金を削減する、保険料を上げるといふと自分の身分を失う可能性が高いのです。高齢化の問題が、社会に深刻な影響を与えることを知っていながら、先送りをする事だけが、政治家が政治家でいられる手段なのです。

国の借金は「一千兆円」を超えています。私やこの本を読んでくださる誰にも返済の責任があるのです。国民は約一億二千万にですから、一人当たり約八三〇万円、人口が減ってきて一億人になれば一人当たり一千万円の借金になります。

少子化の解消を叫ぶ今の政治家は、生まれてくる「あなたの赤ちゃん、あなたのお孫さん」に、平然と一千万円の付回しをしています。

そして、政党を問わず政治家にとつて自己の保身、すなわち選挙での当選を考えたときには、次世代に付回しする以外に身を守る方法がないのです。

それゆえ政治家は、人口ピラミッドの転換が起きる時代の転機にあつては、主体的な活動者になり得ず、課された困難な状況の解決に十分に役立てないと考えています。

主体的な活動者は、国民・個人にならざるを得ないのです。一人一人が、あなた自身が時代の転機に、負担と給付の有り方、便利さと環境問題等、社会の有るべき姿を決めるのです。

現代社会を維持するために、日本と世界は共通の厳しい現状にあることを認めます。ある経営学の教授は、「もうどうやっても滅びに向かつて進むだけだ」と述べています。

しかし、歴史を振り返り現代と対照する中で、リハ医学を変えるために進めてきた研究が「危機に直面する社会状況を転換するパラダイムシフトを導く」と確信しています。

そして、リハ医学パラダイムシフトが、特に日本にとつては、自立型の社会構築の基礎となり、高齢になった団塊世代と次世代との美しい共生を可能にします。

### 希望の革命・国民意識の変革を

介護を求めないということは、社会保障費用が少なくなるだけでは有りません。自分で頑張

って人間の尊厳を守りながら生き抜けることが国民の意識を変え、社会全体の「パラダイムシフト」が起る、起こす転機になるのです。

そして、持続可能な超高齢社会「希望の世紀」実現への転機になるのです。

この本が読者の皆さんの共感を得て、リハビリテーション医学の革新から、社会のあり方、国家の有り方、私達たちの暮らし振りについて、一人一人が考え方を革新し、すなわち「希望の革命」を起こし、次世代を「私達、団塊世代の老後を養うための奴隷」にしないで済むことを、願っています。

最後になりましたが、国際医療福祉大学木村哲彦教授（元国立身体障害者リハビリテーション病院院長）、バイオフィリアリハビリテーション学会名誉会長木島英夫医学博士、産業能率大学牛澤賢二教授と横浜国立大学高田一教授に寄稿をお願いし、快く引き受けていただきました。

この本は、「現状の分析」、「リハビリテーション医学の革新」と、それによる「パラダイムシフト」、そして「希望の革命を起こす・起こせる」、その結果我々の時代が「希望の世紀」になり、高齢者と次世代が共生可能になるとする内容ですが、こうした寄稿から、一貫して科学的な考え方や実験に基づいていることを読者の皆さんに知っていただけるものと思います。

## 天動説と地動説

木村哲彦

天動説と地動説、これは全く相反するパラダイム (paradigm、時代における共通認識) と理解されているが、一つの事象を捉えるものの見方について一つの側面しか見られないと、とんでもない偏った方向に向かってしまうと言う事実は誰しもが経験していることに相違ない。

新しい見方が受け入れられると、全て磁石が北を向くようにパラダイムシフト (パラダイムチェンジ) に陥るのは日本人の特徴なのかも知れないと最近感じている。例は悪いと思いつつ言わせて頂くと、今の若いご婦人達のファッションにも現れているのではないか。Gパンに幼児の下着のようなものを似合う、似合わないに関わらず、人前で恥ずかしげも無く着用し、無様だと感じているのは七十歳過ぎた私だけの感じ方であろうか。何かおかしいと思っっているのは私だけではないと思うのであるが。

中国では数千年間も伝統的な医学が継承され、西洋医学の Evidence based な考えと共存しているし、極めて柔軟に受け容れているではないか。もの見方についても、笠信太郎の著書にもあるが考えた後に歩くのか、歩きながら考えるのか、歩いて後に考えるか、色々なタイプがあることも我々は理解している。これから大きく発展しなければ成らない国では、天才的指

導者によるパラダイム造りも必要であろうが、我が国には其の必要は無く、歩きながら考え、考えながら実行する能力は備わっている筈である。

我が日本は世界の中の一員として存在しつつ、各方面からの視線を浴びている。過去の呪縛にとらわれることなく、大いに独自の発展をするべきでもあり、過去に捉われて未来を失うことの無いように考えたいものである。

現在の日本が試行錯誤の時代の真っ只中であるとすれば、我が国自体の自己評価をする時であると考えざるを得ない。「金銭に関する価値観」、「豊かさに関する尺度」、「家族の持つ意義」、「教育の重要性」、「命の価値、生活の質」これら皆、社会の中で生きる我々及び次の世代に継承させなければならない問題ばかりである。

降って沸いたように急激に生じた少子高齢化は一側面から見ればおめでたい現象であるが一方多くの問題を投げ掛けられたようなもので、この窮地を脱出するすべを皆で考えるときであろうと思ひ、「熱血漢」滝沢茂男氏の意見に耳を傾けている。

また、滝沢氏は社会的リハビリテーションの目で医学的リハビリテーションを評価し、其の手段、ゴール、OOLについて、科学的根拠を無視することなく、現実の社会で採り得る方法と重ね合わせた提言を各所に披瀝している。滝沢氏と同じ考えを持つ者は少なくないと思うが謙しも軌道修正の必要な時の迫っていることを感じるに相違ない。